数値が舞う学校に苦悩する教師と子どもたち

小林　朗

ある高校では新年度の方針を決定する職員会議で、校長が「〇〇大学に何人、△△大学に何人合格させるという数値目標がない」と言って会議そのものをやりなおしさせた。

また県内の大半の中学校では、学校のグランドデザインで「不登校生徒を何人減らすか」「NRT（学力スト）がどの教科とも昨年度より〇・一ポイントでも上げるか」を目標にしている。そのための方策が各学校で計画されている。

高校では年間授業数一〇五〇時間、小中学校では九八〇時間を確保するのに汲々としている。

まさに小中高校とも「数値」が学校に舞っているのである。

一、「教育改革」でストレスがたまる！

六月二二日（火）付けの新潟日報は二〇〇三年度、小中高校の教員で一ヶ月以上休職したのが一六二人とし、そのうち、六割の九九人がうつ状態だと報道している。

そのことが県議会で質問されると、県教育委員会の福利課ではその要因を「個人個人の資質」と「社会の変化」をあげ、過去五年間で地方公務員も休職者が一・九倍、教員は一・七倍となっている。全体的傾向であって教員だけの問題ではないことを説明している。県教育委員会は教職員のおかれた状況を改善しようという意欲はない。言い訳を考えるだけである。

それではなぜ教職員の休職が過去五年間で一・七倍にもなったのだろうか。

また、教職員で人間ドックを受けた三〇～五〇代のうち、七四・八％が治療、精密検査を要するという結果になっている（『にいがた福利だより』No.246）。

四〇代半ばの働き盛りの男性教員が辞職した例をこの四月に二、三聞いた。それも教育委員会や校長の意をできるだけ聞きながら努力してきた教員である。体制に批判的でない人々までが新しい状況にストレスをためて学校から去る。良心が許せないものの何かがあったのだろう。割り切れない感情が私にも押し寄せてくる。

私はここ一、二年学校現場で更なる多忙化が進んだと考えている。それは、「学力向上」という外圧が学校の内部を蝕んだと思っている。そして、すべての教育活動を数値で測ることが学校に強制されたための悲劇に見えている。

二、更なる多忙化はどのような嵐なのか？

小学校は少人数学習が始まってから、職員室に誰もいないことが多い。管理職が出張の時などは事務職員の方が一人おられるだけである。教員が教員室で一息つくこともできない職場がある。まさに学級という城に小学校の教員は籠城している。じわじわと水攻めのように、多忙化が効を奏して落城しなければよいがと思ってしまう。

小学校だけでなく、どの校種の教職員も「いつ辞めようか」と常に考えているという。

学校現場は様変わりをした。数値が舞う学校の実状をご紹介しよう。

第一は、標準学力テスト（ＮＲＴ）である。小学校は国、社、算、理、中学校は国、社、数、理、英、の得点結果が全国の通過率より上か下かを自校の子どもの学力状況に基づいて数値で検証し、その改善の方策を示すことが求められている。学校の実態と課題を教育委員会では、「できるだけ数値的評価ができるような課題」とすることを報告に義務づけている。

そのために教員は小テストや単元テストを授業中に実施したり、授業中の発言、レポートや作文、課題のノート提出の確認など数値的評価を毎時間行っていく必要がある。

はっきりとしていることは、教材研究をないがしろ

にして「評価のための評価」に明け暮れている状況が小中学校ともにあって、さらにひどい方向へ進行している。

多くの人は学校時代、「あの教師の授業はおもしろかった」と認めながら、その教科に興味関心を持って学問への道の扉を開けることになる。ところが数値的評価だけに終始する授業は教師の個性はなくなり、マニュアル化した授業が横行することになっていく。そのことはかえって勉強嫌いを子どもに増やす皮肉な結果になっている。

第二は、学校評価である。学校のあらゆる教育活動を項目別に保護者のアンケート形式（無記名）で実施し、その数値で学校を評価しようとする。その上、管理職にとって都合のいい意見をことさら重要視して、教職員を守らないどころかますます追いつめる傾向が強まっている。

第三は、小学校中心に学級経営案（学級のカルテ）を数値を入れて記入しなさいというものである。「遅刻しない子どもが学級に八〇%いるからA」などと記述させる。大半はA、B、Cの三段階で評価する。数値化がすべて悪いとは言わないが、子どもの教育活動は数値で測れないことが沢山ある。すべて数値で表示することは無理である。

教職員はこの三つの実例にあるように「数値」が舞う学校で今、あえぎ苦しんでいる。

教育は子どもの成長とその人間関係づくりが基本である。白黒はっきりとできない灰色の部分は多くある。その感情的に整理できない部分を理解することが子どものを認識する前提であろう。

数値だけが闊歩する学校現場はそのことを度外視して、子どもの不安の黄色のシグナルを読みとれない超多忙化の現実を教職員に押しつけている。

子どもと教職員が病むのは同時進行なのである。

三、夏休みはもうない！

小中学校ではもう一つ特徴的なことは、夏休みに補充学習、発展学習と呼びながら「補習」が実施されることである。小学校で、夏休みに前半八日、後半八日も補習するところが出てきている。保護者にしてみれば、長期休業中に子どもの勉強を塾に代わって行ってくれる学校は救世主に見えるかも知れない。

しかし、夏休みは本来、子どもたちが日常の学校生

活で味わえない体験的活動をすることが最も大切である。やはり、子どもにとっても〝休み〟は必要である。

三浦綾子『銃口』の坂部先生は子どもたちに「勉強時間には、みんなそうそう喧嘩はしないよな。だけど、遊び時間には時々喧嘩をする。そして、ああ自分が悪かったなあとか、あんちくしょう、絶対ゆるさんぞなんて思ったりする。仲が悪くなったりもする。すると、仲の悪いことがどんなに淋しいことか、わかるようになる。こうして段々君たちの心が優しくなったり、強くなったりして、成長していくんだ。むろん、泳ぎに行ったり、鬼ごっこしたりして、体もぐんぐん大きくなる。いいか、みんな、百点取ることばかり考えるな。もっと大事なことは、みんなで仲よく遊ぶことだ。この組は、よく遊び、よく学んで欲しい」と。ここに「遊び」の原点ともいうべき哲学がある。

教師側では補習に残す子どもへの配慮が大きな鍵になってくる。もちろん「成績の悪い子」を残して、基礎基本を学習させることが補習の目的である。そのため、どう声をかけるのか、子どものプライドを傷つけないようにするには、どうしたらいいのかと頭を悩ませる問題が横たわっている。安易に補習などできない現実がある。

四、教育に未来はあるのか？

現在子どもをめぐる問題が頻発している。諸外国と比べると、事件数は少ないが最近の事件は国民が経験したことのないものばかりなために、日本社会が戸惑っている。

不登校、ひきこもり、子どもの荒れなど子どもたちの反乱は、大人の社会、教育システムへの警鐘というべきものである。われわれは現在の「学力向上」だけの教育改革がうまくいくとは思っていない。そして、それを乗り越える要は子どもたちそのものにあると考えている。

教師は子ども一人ひとりを自立途上の人間として、尊重することが大切である。その上で、子どもたちが集団で達成感のある行事を自主的に行なえる場を設定することが重要である。

制度や仕組みに弊害があっても、それを乗り越えていく力は未来ある子どもたちが必ず展望してくれていることを確信している。

（こばやし　あきら・新潟市中学校教員）